

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	空所と宿約
Author(s)	近松, 明彦
Citation	ニダバ , 23 : 13 - 20
Issue Date	1994-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047969
Right	
Relation	



空所と宿約

近松明彦

1. はじめに

縮約の現象は、単に音韻論的なプロセスとして興味深い現象であるばかりでなく、それは統語論レベルの議論においても重要な役割を果たしてきた。例えば、痕跡理論の初期の段階において、*wanna*縮約の阻止に関わる事例が痕跡が存在する事の証拠として議論されたことなどが思い起こされよう。我々は、関係節における空演算子のLF移動分析、即ち関係節における空演算子が可視統語論ではなくLFで移動するという分析を提案しているのであるが(Chikamatsu(1993a)、近松(1993b))、これを仮定する上でも縮約との関連を考察しておくのは重要なことである。というのも、関係節形成によって生じる空所は縮約を阻止する作用を及ぼすのであるが、従来の説がこの空所をA'-痕跡と見なすのに対し、我々のLF移動分析はこの同じ空所を元の位置に留まっている空演算子として捉えるからである。

ここで縮約と言った場合に問題となる現象は*wanna*縮約と時制縮約(tense contraction)である。このうち、*wanna*縮約と空演算子のLF移動分析の関わりについては既に論じたので(Chikamatsu(1993a)を参照)、ここでは改めて取り上げることはせず、時制縮約について概観しておくことにする。本稿では、主として現在の我々の視点から先行研究をまとめ、最後に時制縮約に関する問題が空演算子のLF移動仮説を特に否定する証拠にならないということを示したい。

はじめに時制縮約とはどのような現象を指すのかを簡単に示しておくことにしよう。次の例を考えてみたい：

(1)a. Who do you think is coming to town?

b. Who do you think's coming to town?

<誰が町に来ることになっていると思いますか>

(Bresnan, 1971: (35))

(1)に見られる現象、即ち、動詞be、haveの3人称現在の形であるis、hasがいずれも-'sという形式に縮約され得るという現象は、よく知られたものであるが、このような縮約を

Bresnan(1971)は(isを時制要素と見なして)時制縮約(tense contraction)と呼んでいる。この現象も、wanna縮約と同様に空所によって阻止されるという性質があり、この特徴はwh-関係節、非wh-関係節の違いに関わらず当てはまるものである。

さて、本稿はこのような時制縮約の性質を次のような順序で概観して行く。まず、2節では、時制縮約の右方依存性を見、3節では時制縮約は動詞移動が前提されていること、及び空所が後続する場合、動詞移動が適用され得ないという特徴を見る。4節では、動詞移動、時制縮約を妨げる原因になる空所が、その統語的分類とは無関係に、単に音韻的に空でありさえすればどの要素でもよいということを見る。そして最後に5節において問題のLF移動分析でもこの点に関して特に差が出ず、問題が生じないということを見ておくことにする。

2. 時制縮約の右方依存性

先ず、時制縮約は、その右側の要素に依存しているという点で、wanna縮約と異なっている¹⁾。次に示すように、wanna縮約の阻止はtoの左側の空所の種類によって条件付けられていた：

(2) Wanna縮約：

- a. Who do you want _ to visit you?
〈あなたは誰に訪問してもらいたいのですか〉
- b. *Who do you wanna visit you?

(Bresnan, 1971: (9))

一方、次に示すように、時制縮約では右側の空所が大きな役割を演ずると言われている(Bresnan(1971)参照)：

(3) 時制縮約：

- a. Do whatever you think _ 's necessary.
〈あなたが必要だ思うことは何でもしなさい〉

(Bresnan, 1971: (35))

- b. Mary's more adept at poker than John is _ at pool.
〈ジョンが玉突が達人である以上に、メアリーはポーカーに熟練している〉

- b'. *Mary's more adept at poker than John's _ at pool.

(Bresnan, 1971: (37))

- c. the book (that) he has _ in his hand
〈彼が手に持っている本〉

- c'. *the book (that) he's _ in his hand

(3a)に見られるように、isは直前の位置に空所があっても（ここではwh-痕跡）、縮約可能であるが、(3b')が示す通り、空所が後続する場合には縮約を受ける事が出来ない。

更にBresnan(1971)は、時制縮約の右方依存性を示すべく、この現象が文頭でも生じ得ることを例証している。次にその例を引用しておくことにしよう：

- (4)a. Is that so?
 <あれはそうなんですか?>
 b. 's that so? [zaetsow]
 <同上>

(Bresnan, 1971: (39))

このように、時制縮約は後続の要素に影響される。

3. 時制縮約と動詞移動

次に、時制縮約における動詞移動との関連を見ておくことにする。Chikamatsu(1993a)ではwanna縮約をtoの主要部移動と見なしているが、同様に時制縮約もある種の移動であると考えられる事が出来そうである。本研究の考え方は、時制縮約が起こるためには動詞移動が行われる必要があり、後続空所による縮約の阻止が動詞移動の阻止を原因とするというものである。このような考え方は、Baker(1971), (1981)が提案した考え方に基本的に沿ったものである。Baker(1971), (1981)は助動詞遷移(auxiliary shift)という移動プロセスを仮定しており、それは強勢という音韻的な要素に影響されると考えている。ここで、Bakerにおける助動詞遷移はPollock(1989)などにおける動詞移動のある種のタイプのものに相当するものと思われる（尚、この助動詞遷移に関連した議論として、Sag(1978), (1980)も参照されたい）。以下、本節ではこの点を例証しておくことにする。

フランス語などにおいてはVPの主要部の動詞がs-構造においてIPの主要部に繰り上げられるのだが、英語においてはIPの主要部の接辞がs-構造でVPの主要部まで下向きに移動し、動詞の人称語尾として実現する(Pollock(1989)参照)。このことは、次のような例の副詞の位置(動詞句の初頭位を明示する)から理解されよう：

- (5)a. *John kisses [often _ Mary].
 ↑ _____ |
 b. Jean embrasse [souvent _ Marie].
 ↑ _____ |

c. John _ [often kiss-es Mary].

↑ _____ ↑

<ジョン (ジャン) はよくメアリー (マリー) にキスをします>

(Pollock,1989:(4))

ここで例外となるのが、be動詞などの疑似助動詞的な要素である。例えば、be動詞とその他の動詞とで、頻度の副詞の分布が異なる事に注目しよう：

(6)He is always in time for meals.

<彼はいつも食事には間に合っている>

(Thomson and Martinet,1960:p.56)

(7)They always go to Italy for their holidays.

<彼らは休暇中いつもイタリアに行きます>

(Longman Dictionary of Contemporary English)

このように英語でもbe動詞などは例外的にs-構造で動詞移動が生じることが知られている(Chomsky,1991参照)。ところが、be動詞の後続の要素が空所である場合、s-構造での動詞移動が生じないことが、次のデータからわかる：

(8)a. We told him what a good boy you often are _ at school.

<君が学校でどんなに立派な事を度々してるかという話を僕は彼に話してやりました>

b.*We told him what a good boy you are often _ at school.

(Sag,1980:(3))

例外的動詞移動が阻止される場合の条件は、時制縮約が阻止される場合の条件と同一であることに注目されたい：

(9)時制縮約の阻止：

a.Mary's more adept at poker than John is _ at pool.(=(3b))

<ジョンが玉突が達人である以上に、メアリーはポーカーに熟練している>

b.*Mary's more adept at poker than John's _ at pool.(=(3b'))

(Bresnan,1971:(37))

ここで、動詞移動が時制縮約の前提であると仮定しよう。換言するならば、動詞移動によってisがVP内部から移され、主語名詞句と指定部・主要部関係に入った場合のみ時制縮約が可能であると考えるのである。この場合、後続の空所による時制縮約阻止の効果は、後続空所による動詞移動の阻止に付随して生じる波及効果の一つとして捉えることが出来るよう²⁾。

4. 空所の種類

次に、動詞移動を阻止し縮約を妨げる空所の種類について考えよう。次のような例を考えたい：

(10)a. Mary is good at hockey, and Jean is _ at volleyball.

〈メアリーはホッケーが、ジーンはバレーボールが得意だ〉

b. *Mary is good at hockey, and Jean's _ at volleyball.

(Radford, 1981: ch. 5. (62))

この例は、等位接続における後続の要素が、先行要素と同一的となって空所化されているものであり、ここでの空所は移動のために生じる痕跡であるとは考え難く、恐らくはVP削除に類似したもののようと思われる。このように、時制縮約を阻止する空所は、空演算子構文における空所やwh-痕跡に限られず、(10)に見られるような移動によらない空所も含まれるという事実に注目したい。このように、時制縮約の阻止をもたらす空所は空範疇の区分を超越しており、単に音韻的に空という事を指定するのみで良い。

5. 空演算子のLF移動分析

以上の事を踏まえて、空演算子のLF移動分析を仮定しても特に問題が生じないと言う点を例証しておくことにしよう。次の関係節の例を見よう：

(11)a. It is that kind of book.

b. It's that kind of book.

〈それはあの種類の本だ〉

(12)a. the kind of book (that) it is _

〈それが属している種類の本〉

b. *the kind of book (that) it's _

(Radford, 1981: ch. 8, (27)-(28))

(12a)の表現は、従来の分析では(13i)のs-構造(PF)を持ち、LF移動分析では(13ii)のs-構造(PF)を有する：

- (13) i. the kind of book [CP Op₁ (that) [IP it [UP is t₁]]]
 ii. the kind of book [CP e (that) [IP it [UP is Op₁]]]

このように、isに後続する空所は(13i)ではA'-痕跡t₁であるが、(13ii)では元の位置に残されている空演算子(null operator in situ)である。しかしながら、動詞移動が妨げられる環境は、[__ φ](φ=phonetically empty)であり、A'-痕跡も元位置の空演算子もいずれも音声的に空の要素であると言う点では同じである。つまり、動詞移動、時制縮約に関する限り、(13i)と(13ii)はそれぞれ(14i)と(14ii)のように互いに近似した形を持っていると考えられる：

- (14) i. the kind of book [CP Op₁ (that) [IP it [UP is φ₁]]]
 ii. the kind of book [CP e (that) [IP it [UP is φ₁]]]

このように、時制縮約の問題はLF移動分析を仮定しても実際には特別変化は生じない。同じ事が次の場合にも当てはまる：

- (15)a. He has a book in his hand.
 b. He's a book in his hand.
 <彼は本を手をしている>
 (16)a. the book (that) he has __ in his hand.
 <彼が手にしている本>
 b.*the book (that) he's __ in his hand.

(Radford, 1981: ch. 8, (28)-(29))

(16a)は従来の分析とLF移動分析とで(17)に示す別々のs-構造(PF)を持つが、動詞移動、時制縮約に関しては(18)のような近似した構造であると考えることが出来る。

- (17) i. 従来の説: the book [CP Op₁ (that) [IP he [UP has t₁ in his hand]]].
 ii. LF移動分析: the book [CP e (that) [IP he [UP has Op₁ in his hand]]].
 (18) i. 従来の説: the book [CP Op₁ (that) [IP he [UP has φ₁ in his hand]]].
 ii. LF移動分析: the book [CP e (that) [IP he [UP has φ₁ in his hand]]].

6.まとめ

以上に見てきたように、時制縮約の阻止はこのように極めて「表層的な」性質の現象であり、縮約阻止の原因となる空範疇の種類を本来区別しないという性質を持つ。従って、我々の空演算子のLF移動分析には影響を及ぼすことはない結論付ける事が出来よう。

注

* 本稿をまとめるに際しお世話になった多くの方々に感謝申し上げます。尚、もし不適切な箇所があった場合には、筆者自身によるものである。

(1)時制縮約におけるこの右方依存性(rightward dependency of tense contraction)はBresnan(1971)によって指摘されたものである。

(2)以上の分析はbe-動詞に例外的に観察される英語の動詞移動に基づいた考え方であるが、これに類する分析は既にBaker(1971),(1981)において(動詞移動ではなく)助動詞遷移(auxiliary shift)という用語を用いて行われている。Baker理論に基づくならば、助動詞遷移には強勢弱化(stress reduction)が前提となっていて、空所が後続する場合強勢弱化が起こらないため、助動詞遷移(=動詞移動)が生じないということになるのである。つまり、空所を右側に伴うと「時制縮約=(i)助動詞の弱化プラス(ii)助動詞遷移(=動詞移動)」というプロセスのうち「(i)助動詞の弱化」が欠けるので縮約が成立しないのだということになる。

これを我々が立脚するT-モデルで捉え直してみよう。Be動詞の動詞移動は強勢の付与に先だつてs-構造で適用されるのである。こう考えると、動詞移動というシンタクスの(つまり、音韻解釈以前の)プロセスに強勢の有無が関わるという矛盾が生じる。一つの可能な分析は、動詞移動に先立つ或る段階で[+emphasis]などといった素性を一定の要素に与えておくというものであろう。そして、この素性があると動詞移動が出来ないという条件を課し、この素性は後に音韻解釈及び意味解釈の両方のレベルで解釈されると考えるのである。とはいえ、この点の扱いは現段階では不明な点が多く、今後の課題としておきたい。

参考文献

- Baker,C.L.(1971): "Stress Level and Auxiliary Behavior in English": Linguistic Inquiry,vol.2,167-181.
- Baker(1981): "Auxiliary-Adverb Word Order": Linguistic Inquiry,vol.12,309-15.
- Bresnan,Jean W.(1971): "Condition and the Transformational Cycle in English": ms., reproduced and distributed by the Indiana University Linguistic Club in

1978.

Chikamatsu, Akihiko(1993a): "Contraction and Null Operator In Situ in English":
NIDABA, vol.22, 33-42.

近松明彦(1993b): 「英語関係節における空演算子の適切な扱いについて」 : 日本言語学会
第106回大会口頭発表.

Chomsky, Noam(1981): Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures:
Dordrecht, Foris Publications.

Chomsky, Noam(1991): "Some Notes on Economy of Derivation and Representation": in
R.Freidin(ed.): Principles and Parameters in Comparative Grammar: 417-454.
Cambridge, Massachusetts, MIT Press.

Pollock, Jean-Yves(1989): "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure
of IP": Linguistic Inquiry, vol.20, 365-424.

Radford(1981): Transformational Syntax: Cambridge, Cambridge Massachusetts, MIT
Press.

Sag, Ivan A.(1978): "Floated Quantifiers, Adverbs, and Extraction Sites":
Linguistic Inquiry, Vol.9, 146-50.

Sag, Ivan A.(1980): "A Further Note on Floated Quantifiers, Adverbs and
Extraction Sites": Linguistic Inquiry, vol.11, 255-57.)

Thomson, A.J. and Martinet, A.V.(1960): A Practical English Grammar: Oxford, Oxford
University Press.

Longman Dictionary of Contemporary English(New Edition): Essex, Longman, 1987.